

# CLTにおける文法システムのあり方について

—後置修飾をどう考えるか—

荻原 洋

## What Could the Grammar Be Like in the Communicative Language Teaching? : Managing the Post-Modifications

OGIHARA Hiroshi

E-mail : ogihara@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：後置修飾, CLT, 話しことばの文法

keywords : post-modification, Communicative Language Teaching, grammar for spoken language

### 1. はじめに

大学生と英語の勉強の話をする時、たいていの学生は「～が嫌いだった」「～は苦手だった」「～が全然分からなかった～」というような言い方で、特定の文法事項（規則）を挙げる。圧倒的に多いのは、時制（完了形）、冠詞、分詞構文、仮定法であるが、名前を出さないものでも、意外とよく分かっていないことがある。たいがいそのようなものは、普段は何の疑問も感じていないのに、いざ教育実習などで自分が教えなければならなくなった時に、「あれ？これはなんだ？」と戸惑うことになることが多い。そこで本小論では、そのような事例の1つとして後置修飾（post-modification）を取り上げ、CLT（Communicative Language Teaching）の視点を念頭に置きつつ問題点の整理を行うことによって、後置修飾をより上手に教えるためのヒントとなるような知見が得られないかどうか、考えていくことにしたい。

### 2. 後置修飾とは

後置修飾とはその名称からも分かるように、修飾語が被修飾語の後に来て、被修飾語の表す意味概念や指示対象の幅を限定する働きを持つものと考えられている。この意味では動詞の後に来る様態の副詞等もそれにあたるが（He always speaks frankly. の frankly など）、論点を簡潔にするため本論では被修飾語の種類を名詞句に限定して話を進めること

にする。

そこで改めて後置修飾とは何かと考えると、意外に答えが難しいことが分かる。というのも、ことばの問題というのは形式と意味の両方の面から考えるのが普通だが、形式については“名詞（句）の後ろに付く前置詞句や関係代名詞節”などと言えば済むが、意味はそう簡単にはいかないからである。もちろん前置詞句や関係代名詞節に使われている単語の意味を規則に則って組み合わせ、句や節全体の意味を示すことはできる。しかし問題はなぜ“後置”なのかということにある。その点に答えが与えられない以上、後置修飾に対する正しい理解が得られたことにはならない。

例えば、良く知られているように、単純な形容詞が名詞を修飾する場合、前置と後置で意味が異なることがある。

- (1) a. a navigable river (常時船が航行できる川)
- b. a river navigable (普段はできないが一時的に航行可能となっている川)

この違いは、次のような文で用いられるとよりはっきり分かる。

- (2) It's the rainy season here. You will come across the river navigable.

また、名詞句を修飾している例ではないが、時を表す副詞節でも、主節の前と後にある場合で意味

(働き) が異なることが分かっている (荻原, 2000)。

- (3) a. When I was 10 years old, my father died. (私が10歳の時に父は死んだ)  
b. My father died when I was 10 years old. (父が死んだ時, 私は(僅か)10歳だった)

このような意味的な違いが生じる原因はひとえに文中の各要素の相対的位置関係にあるのだが、日本人英語学習者のように学習教材の多くが書かれた英語である場合、どうしてもまず文全体を見て修飾関係などを確認し“日本語の修飾構造に合わせて”日本語に訳して理解しようとするため、(3.a)と(3.b)が同じ訳(意味)になってしまう。しかも従属接続詞の学習と称して、主節と従属節の順序を入れ替える練習問題などが課されるため、ますます両者の違いを感じるようになってしまっている。次のような文は、前後の文脈が無くても(あればもっと分かりやすいのだが)、前から順に状況を思い描いた方がはるかに自然であろう。

- (4) a. I was playing the piano when there was a knock at the door.  
b. He was walking down the street listening to music on his headset when a car hit him.  
c. The other day I was walking from my flat in Tokyo to the local railway station when I happened to pass a group of small children who were playing by the roadside.

つまり、後置修飾とは何かという問いに対しては、このような“後置という位置のもたらす意味”への言及が必要不可欠であり、それ無くして適切な教授法を選択することはほとんど不可能なのである。

### 3. 中学校教科書での説明

では後置修飾は中学校用の検定教科書ではどのように扱われているのだろうか。東京書籍 *New Horizon* (2006年版) の解説書から見てみたい。

“名詞句に対する後置修飾”への言及が初めて行われるのは、1年生の半分を過ぎたあたりで、次の

会話の one in the afternoon に関して「構造的には前置詞句による名詞の後置修飾である」(p.138) という説明がなされている。

- (5) What time is it in Wakaba now?  
It's one in the afternoon.

また次のユニットでは群衆の中でのやりとりのシーンで(6)のような2つの表現が続けて用いられ、「遠くの人なり物を指す that を用いただけでは、どれを指しているか十分でない場合があるので、何らかの情報を付け加えることが多い。前の例では、that tall man と形容詞を付けていたが、今度は with short hair という形容詞句を用いている。こういう句は修飾する名詞のあとに置かれる」(p.161. 下線は筆者) という解説がなされている。

- (6) a. Do you see that tall man?  
b. Do you see that woman with short hair?

この解説の中の「こういう句は…」の部分解釈すると、“英語では、名詞を修飾する語句が長い場合は名詞の後に置かれる”ということになるだろうか。いずれにせよ、位置を示しただけで“位置を持つ意味”についての言及は見られない。(そのせいか、解説書の巻末指導資料の「6. 文法・語法解説事項一覧」にも“後置修飾”という項目は載っていない。) 別のパターンの後置修飾が次に出てくるのは2年生の後半になってからで、-thing で終わる名詞に形容詞が付く場合である。

- (7) Is there anything interesting in it?

ここでの説明は「これまでは日本語と同じように、It can tell us about different cultures. や You can find interesting things around your house. など「形容詞+名詞」の語順の場合のみであった。ここでは anything+interesting という語順に注意しなければならない。もっともこの場合の理由は簡単で、some [any] interesting things と「some [any]+ほかの形容詞+名詞」になるように、some, any はほかの形容詞の前に付く。something, anything のように1語になったものは、その前に形容詞を付けるわけにはいかないの、後置されるわけであ

る」(pp.182-3)となっている。理由の説明の意図が分かりにくいのが、修飾語句の位置に関する解説であることは間違いない。

後は3年生になってからで、比較的早い段階でto不定詞の形容詞的用法が導入される。

- (8) a. Every morning, Meena has a lot of work to do.  
b. I have a lot of things to learn.

この種のto不定詞の用法については「名詞や代名詞のあとに付いて、その意味を限定する不定詞を「形容詞的用法」という」(p.92)というような説明がなされている。さらに、この2ユニット後には(9)のような分詞による後置修飾が、その次のユニットでは(10)のような接触節(contact clause: 関係代名詞を含まない関係詞節)と(11)のような関係代名詞節が続けざまに導入されている<sup>1)</sup>。

- (9) a. This is a picture taken about 70 years ago.  
b. The people answering the telephones here are operators.  
(10) a. This is a book I bought in the United States.  
b. These are some of the people you can find in it.  
(11) a. She's the scientist who wrote *Silent Spring*.  
b. It was a book that challenged our view of nature.  
c. Some other books that she wrote are *The Sea Around Us* and *The Sense of Wonder*.

分詞による後置修飾については「形容詞的とは言っても、動詞的な性質を失っていないので、目的語や修飾語句をともなうことが多い。その場合は名詞(句)を後ろから修飾することになる」(p.167)という説明がなされている。また、接触節の導入に関しては「後置修飾については、前置詞の付いた句から、不定詞、分詞と拡大してきたので、ここでは、文から転じた「節」が後置修飾をすることを理解するのはそう難しくはないはずである」(p.189)という解説

がある。

このように、この教科書では6種類の後置修飾が導入されているが、その際の説明のほとんどは“名詞(句)の後ろから”という位置に関するものであり、修飾語句そのものの構造的特性に対する配慮の必要性は述べられていても、“後置”修飾の役割については不明なままである。そこで後置修飾の例を教科書以外の言語資料からも広く集め検討してみることとする。こうするのは、日本の検定教科書は基本的に文法シラバスなので、個々の文法事項の導入をどうするかという点が優先され、必ずしも現実の用法を反映した教材作りとはなっていないからである。

#### 4. 後置修飾の実例

今回言語資料として用いたのは、①中学生向け読み物、②高校生・大学1年生向け読み物、③映画の台詞、の3種類である。①は文理・全教材という出版社の*Fun Fun Reading*という中学生向けサイド・リーダーで、学年毎に50~150語程度の読み物が14編ずつ収められている(3冊の総語数で約4,200語)。②は成美堂の初級速読用教材*Basic Faster Reading*で、220語程度の読み物が20編収められている(総語数で約4,400語)。③は*Roman Holiday*(邦題『ローマの休日』1953年)の台詞スクリプト(総語数8,000語程度)と*When Harry Met Sally*(邦題『恋人たちの予感』1989年)の台詞スクリプト(総語数18,000語程度)である。このうち③はほとんど口語英語の資料と考えて良い。

この①~③の資料に現れる後置修飾の例を、その形式と文中での位置を基準に分類してみることにする。形式は、前置詞句PP(prepositional phrase)、形容詞句AP(adjectival phrase)、to不定詞節IC(infinitive clause)、分詞Pt(participle: -ingと-en)、接触節CC(contact clause)、関係代名詞節RC(relative clause)の6種類とし、文中の位置は被修飾語の位置で分け、主語Sb(subject)、連結詞(copula)などの補語Cp(complement)、動詞の目的語OV(object of verb)、前置詞の目的語OP(object of preposition)の4種類とする。なお、次のような、いわゆる“付帯状況のwith”は、一見後置修飾を含むようにも見えるが、batsとin handの間に“主部+述部”の関係(The bats are in their

hands.) が成り立っており、後置修飾の例とは考えない。(なおこの文は *When Harry Met Sally* の中でシーンの説明をしている個所にあったもので、述語動詞が省略されている。)

(12) Harry and Jess with bats in hand as the

machine pitches.

実際に現われた後置修飾の数は以下の通りであった。Pt (分詞) の欄の小文字の e は過去分詞 (-en) の例を、i は現在分詞 (-ing) の例を表わしている。

	Fun Fun Reading					Basic Faster Reading					Roman Holiday					When Harry Met Sally				
	Sb	Cp	OV	OP	計	Sb	Cp	OV	OP	計	Sb	Cp	OV	OP	計	Sb	Cp	OV	OP	計
PP	9	1		1	11	18	1	3	4	26	4	2	5	3	14	7	2		1	10
AP			2		2	1				1			1		1		2	1		3
IC		1			1	1	3	3	1	8					0		1	2		3
Pt			e1	e1	2	e7	e1	e3 i1	i2	14 3		i1	e2		2 1	e1		e1		2
CC					0	1		2	1	4	2	7	5	1	15	7	14	3	12	36
RC	1				1	9	6	9	8	32	1	3	6	1	11		5	6	9	20
計	10	2	3	2	17	37	11	21	19	88	7	13	19	5	44	15	24	13	22	74

この表を見る限りでは、名詞句に対する後置修飾の使い方として次のようなことが分かるだろう。

- 1) 初級者 (中学生) 向けの読み物では後置修飾はそれほど多く使われない。
- 2) 初級者向けを除き、書きことば (*Basic Faster Reading*) と話しことば (*Roman Holiday* と *When Harry Met Sally*) を比べてみると、圧倒的に書きことばの方に後置修飾が多い。(書きことばでは約50語につき後置修飾が1つ、話しことばでは約220語につき1つ出てくる。)
- 3) 主語名詞句に後置修飾が付く場合は、多くが前置詞句の形である。
- 4) 形容詞句 (AP) や to 不定詞 (IC) による後置修飾は実際には意外と少ない。
- 5) 分詞 (Pt) による後置修飾はほとんど書きことばにのみ現れる。
- 6) 関係代名詞節 (RC) はどちらにも現れるが、書きことばでかなり多用されている。
- 7) 接触節 (CC) はほぼ話しことばだけで用いられている。

1) については、どのタイプの後置修飾であれ、単純な前置形容詞などと比べると長めの表現になり、当然構文的な複雑さも増し、初級学習者用教材にはあまり適さないためと考えられる。また2) については、話しことばは音声を媒体とするため、発せら

れたメッセージが瞬間的に次から次へと消えていくという宿命を持っており、“さかのぼって理解する”とか“既出の情報を手掛かりに判断する”ということには元々適していないため、このようになるのは当然のことである。

3) については、英語では通常主語は文頭に置かれ、文のトピックを示すだけでなく、連続する文間の関係を保つ談話マーカー (discourse marker) の働きも担うため (McCarthy. 1992, 荻原. 2000), 構造的にも意味的にもシンプルである方が好ましいとされる。従って、後置修飾の中では比較的短く、構造や意味もはっきりしている前置詞句が多く選ばれるのであろう。このタイプが多い *Basic Faster Reading* (書きことば) と *When Harry Met Sally* (話しことば) から、いくつか典型的な表現をそれぞれ (13) と (14) に示す。(以下、例文中の下線は全て筆者による。)

- (13) a. Almost every zoo around the world keeps a few lions.  
 b. People in the United States usually watch seven hours of television each day.  
 c. For food, rats in the city eat mostly garbage.  
 d. The most expensive room in the hotel is called the Galactic Fantasy Suite.

- e. Everything in the room is painted white or silver or is made of glass or metal.
- (14) a. The man on the Aisle looks up at Harry, ...  
 b. I'm saying that the right man for you might be out there right now and ...  
 c. Then she tells me that someone in her office is going to South America, and ...  
 d. [Do] You know how a year to a person is like seven years to a dog?

これらの例からも分かるように、このタイプの後置修飾の動きのほとんどは、主語名詞句が指し示す対象の含まれる範囲（母集団のようなもの）を示すというものである。これは指示対象の限定の仕方としては非常に緩やかなものであり、主語には構造的にも意味的にも重いものを置かないという英語のスタイルがきちんと守られている。

次に、4)の形容詞句(AP)やto不定詞節(IC)が意外と少ない理由であるが、実際の用例を見ると、かなりコロケーション的に限定されていることが分かる。例えば形容詞句の場合は、(15)のようなsome-/anythingやsome-/anybodyなどを修飾する例が大半であり、to不定詞節の場合も、該当する個所を抜き出してみると、(16)のようにいずれも“耳慣れた”表現ばかりであり、用例の少なさを考えると、意外と汎用性・拡張性が低いかもしれない。

- (15) a. Nobel invented something very popular.  
 b. Why can't you find someone single?
- (16) things to see / place to stay / nothing to eat or drink / a way to save / prize to win / hours to kill / someone to go with

5)の分詞(Pt)も、コロケーション的にはかなり限定されているように思われる。例えば、一番多いのが(17)のnamedの例で、分詞による後置修飾の約1/3がこの表現であった。

- (17) a. One bird named Prudle stood out among the “talking birds”.  
 b. A group named the American Bowling Congress began around 1900.

確かにこのような表現は話しことばでは使いにくいように感じる。(17. a)であれば、次のように言う方が自然であろうか。

- (18) a. One bird, Prudle, stood out among the ...  
 b. One bird, his name is Prudle, stood out among ...

(19)はnamed以外の過去分詞の例であるが、to不定詞節の場合と同じで良く目にする表現が多いように思われる。(該当する部分だけを示す。)

- (19) a. different kinds of beer made around the world  
 b. Of all the beer sold in the United States, ...  
 c. the birds best known for this  
 d. the rats born later  
 e. a fund for prizes given to people who worked for ...  
 f. the inventor of the explosive used for bullets  
 g. The young man involved is named HARRY BURNS.

同じ分詞でも現在分詞の例は非常に少なく、(20)に挙げた例からも分かるように、過去分詞の場合と比べ、これといった常用表現的なものの存在も感じられない。(なお、最初の例のhorses winning racesについては“主部+述部”の関係を含むという解釈も可能であろう。)

- (20) a. Mr. Godley had eight dreams about horses winning races.  
 b. The garden has a small river running through it.  
 c. There's a car waiting.

これだけの資料では、現在分詞が過去分詞に比べて後置修飾で使いにくいとまでは言えないが、過去分詞の方にだけ常用的な表現が見られることも考え合わせると、用例数の差にはなんらかの理由があるのかもしれない<sup>2</sup>。いずれにせよ、分詞の場合は、接触節や関係代名詞節と同じように文的な性質を持ちつつも、それらに比べて欠損する要素が多いため

(典型的には主語や時制要素など), その分意味解釈上の負担があり, 常用表現的な場合を除いてはあまり好まれないのかもしれない。

6) の関係代名詞節 (RC) の分布と, 7) の接触節 (CC) の分布とは, 関連させて考えると分かりやすいだろう。まず書きことばでは, 6 種類の後置修飾形の中で関係代名詞節が最も多用されているのに対し接触節は極めて少ない。逆に話しことばでは接触節の方が多用され, 特に, 比較のおとなしく丁寧な話し方であると考えられる *Roman Holiday* に比べ, より日常的な会話のやりとりと思える *When Harry Met Sally* の方では, 後置修飾のほぼ半数が接触節である。また, 話しことばでは関係代名詞節も少なからず用いられるが, 主語名詞句に付くことはほとんど無い。既に述べたように, 英語では主語を重くすることを嫌うため, 話しことばの世界では接触節と関係代名詞節の重たさはだいぶ違うのかもしれない。そのあたりの事情は, 実際の例文を声に出して読んでみることによって, 簡単に納得できるであろう。(21) は話しことばで主語名詞句に接触節がついた例 (該当箇所のみ) であるが, 声に出して読んでみても主語名詞句が重くなった感じはしない。ところが, (21. a'~e') のように主語名詞句と接触節の間に関係代名詞の *that* を補ったものを同じように声に出して読んでみると, 急に関係代名詞節のあたりで流れが重くなるような感じがする。逆に言えば, 接触節のこの軽さがいかにも口語的響きを持つため, 書きことばでは用いられないのであろう。

- (21) a. No one I know would call at this hour.  
b. Everything we do is so wholesome.  
c. the last thing you want to do is date your wife.  
d. every time anyone we knew got married, ...  
e. the person you're involved with doesn't understand why ...  
a'. No one that I know would call at this hour.  
b'. Everything that we do is so wholesome.  
c'. the last thing that you want to do is date your wife.  
d'. every time anyone that we knew got married, ...

e'. the person who you're involved with doesn't understand why ...

さらに, 書きことばであれば主語名詞句に關係代名詞節が付くことも可能であるとはいえ, そこには主語ならではの制約があるように思われる。次の (22) はこのタイプの典型的な例 (全11例中, 9例がこのようなパターン) であるが, いずれも似たような特徴を有している。

- (22) a. because the people who studied the food made a mistake.  
b. Even some children who hated the taste began to eat ...  
c. One thing that all of these plants have in common is ...  
d. The cowboy who can do this the fastest is the winner.

つまり, 主語名詞句が指示する対象がどちらかと言えば一般的なものであるということ (people は感覚的には thing のヒト版に近い。また d の例は cowboy の歴史を述べた文章に出てくるもので, cowboy は最頻出語の 1 つである), また關係代名詞節の中に既に文脈に登場しているものを指し示す語句が含まれていること, の 2 点である。指示対象が一般性の高いものであるということはそれだけ意味内容が少ないということであり, また, 關係代名詞節の中に文脈との繋がりを示す語句があるということはそれだけ關係代名詞節の情報量が少ないということになる。従って, (22) の例は, 書きことばであっても主語名詞句にはそれなりの軽さが求められるということの分かりやすい証拠とも言えよう。

## 5. 後置修飾をどう考えるか

前節までの観察を整理すると次のようになるであろう。まず, 書きことばと話しことばの対比という観点から見ると,

- 後置修飾は書きことばで多用される形式である。

また, 後置修飾の形と被修飾語の位置との関係という観点から見ると,

- 形容詞句, to 不定詞節, 分詞の3つはどの位置でもあまり使われていない。使われる場合でも常用表現的なものが多い。
- 前置詞句は主語名詞句に付く場合が多い。
- 関係代名詞節は書きことばと話しことばの両方で多用されるが, 話しことばでは主語名詞句には付かない。また書きことばでも主語名詞句に付くものはかなりタイプが限定される。
- 接触節はほぼ話しことばだけで用いられる。

このように整理すると, 文要素の中で主語だけが特別な関わり(あるいは影響力)を持っていることが分かる。これは, 主語以外の要素(補語, 動詞の目的語, 前置詞の目的語)は文末に来ることも多く, それらに付く後置修飾も当然文末に置かれるのに対し, 主語に付く後置修飾は必ず文の中ほど(文の端以外)に存在するということと関係があると思われる。つまり, 主語に付く後置修飾は必ず“動作主(Agent) → 動作(Action) → 対象(Target)”という文の基本構造の中に割って入る形になるのに対し, 主語以外の要素に付く後置修飾は必ずしもそうはならないのである。違う言い方をすれば, 後置修飾の用法(あるいは分布)は, “文頭から文末に向かって一方通行で意味を理解・構築していく”という, 人間のことばに本質的に課されている制約に明らかにコントロールされている, とも言えよう。それは話しことばにおいて顕著であるが, 書きことばにおいても例外ではない。

このように考えてくると, 後置修飾の用法について, 別の見方が可能になってくる。つまり, 後置修飾は“動作主→動作→対象”という情報の流れの中に割って入るため, その流れを妨げないようになっていなければならないほど後置修飾としては好ましい, ということになるのである。では, 流れを妨げる要素・要因とはどのようなものであろうか。

これには大きく分けて2つのタイプがあると考えられる。1つは“邪魔なものがある”であり, もう1つは“必要なものが無い”である。必要なものが無いとは, 被修飾語と後置修飾表現とを関係づけで解釈する(意味を構築する)ことを容易にするような要素が消えてしまっている, というような意味である。本論で対象としてきた6種類の後置修飾で言えば, それは次のように分けられるだろう。

#### A) 邪魔なものがあるタイプ

- 関係代名詞節: 関係代名詞(that など)でその前後が分断される。

#### B) 必要なものが無いタイプ

- 形容詞句: 被修飾語との間を結ぶもの(linking word)が無い。(当然時制要素も無い。)
- to 不定詞句: 時制要素が無い。多くの場合主語も無い。
- 分詞: 主語や時制要素が無い。

前置詞句と接触節はこのどちらでもないため, 後置修飾形としてはより望ましいタイプと言えよう。(前置詞は元々2つの指示物の間の関係を示すためのものであり, 前置詞句による後置修飾の解釈が難しくなることはあり得ない。また前置詞句には最初から文的要素は含まれないので, 何かが省略されている訳でもない。接触節では主語と時制要素は省略されないので, 被修飾語との意味関係を理解することは容易である。しかも被修飾語との間に何の介在物もない。) 実際, 今回の資料中, 話しことばに限れば, 主語名詞句に付く後置修飾22例のうち20例が前置詞句または接触節の例である。

先に述べたように, 後置修飾といえども, 文頭から文末に向かって一方通行で意味を理解・構築していくということばの制約の下にある。それは, 主語名詞句に付く後置修飾が被修飾語との関係を容易に解釈されうるような形を取り, 主語から述語へという流れを妨げないようになっていることから明らかである。このような理解のもとでは, 後置修飾は決して“既に出てきているものに逆戻りしてその対象を限定する”ような働きを持つものではない, と言える。

では改めて後置修飾の働きとは何であろうか。“後置”ではあるが前方にある情報へと逆戻りしながらの解釈を必要とするわけではない。従って“修飾”ではあるが被修飾語の指示対象を強く限定する働きを持つわけでもない。であれば, むしろ挿入表現的な特徴を有していると言えるだろうか。(23)の例で見てみよう。これは(21. d)をその前後も含めて示したものであるが, 主人公の女性が自分の恋愛について, 何でも話せる男友達に滔々と話しているところである。(下線と日本語訳は筆者)

(23) When Joe and I started seeing each other,

we wanted exactly the same thing. We wanted to live together, but we didn't want to get married because every time anyone we knew got married, it ruined their relationship. (誰だって、私たちの知ってる範囲でだけど、結婚したら必ず...)

自分の経験を一気に話して、さらにそれを一般論にまでしようとした時に、ちょっと冷静になって“私とあなたの共通の知り合いに限って言えばね”と挟んだのである。主人公の気持ちになってこの台詞を声に出して読んでみれば、その感じが良く分かるであろう。

このような感覚は接触節だけに限らない。制限的と言われている関係代名詞節でさえ、後置ゆえに同様の働きを持つ。次の(24)は(22. b)に1つ前の文を加えたものである。(下線と日本語訳は筆者)

(24) Spinach became a necessary part of many people's diets. Even some children who hated the taste began to eat the vegetable. (子供たちでさえ、だいたい子供はあの味が嫌いだが、この野菜を食べ始めたのである)

この前のところで、ポパイという漫画のヒーローがホウレン草を食べて活躍したためホウレン草の消費が伸びた、というエピソードが語られていて、ここはその続きである。つまり、ホウレン草はとても体に良いのに、子どもはなかなか食べなかった、ということが暗に示されている文脈で、この文が出てくるのである。従って、この関係代名詞節は子供たちという母集団からホウレン草が嫌いな子供を抽出するような働きは無いと言えよう。

もちろん、書きことばに出てくる関係代名詞節の中には、結果的に被修飾語の指示対象を限定する働きを担うものも少なからずあるだろう。しかし問題とすべきは、文中での語句の位置関係や文脈を無視して、“カンマで区切られていなければ制限的(restrictive)、区切られていれば非制限的(appositive or non-restrictive)”というような安易な解釈規則に考え無しに従ってしまうことの是非である。カンマは書きことばでのみ利用可能な補助手段・小さな手掛かりの1つに過ぎず、それに盲目的に頼っていると誤った理解に至る危険性があるということ

は、“(カンマで区切られていない) 後置修飾が制限的な意味合いを持たない”と言う本論での指摘からも明らかであろう<sup>3</sup>。ことばはやはり、その普遍的・本質的な特性に基づく自然な形で、つまり文頭から文末に向かって順次理解されるようになっているのである。

## 6. 教授法への示唆

ここでは、これまでの観察を基に後置修飾をどのように教えたらいかにについて何らかの示唆を得たいと思う。ただし、一口に後置修飾の教え方と言っても、後置修飾には様々な形、様々な被修飾語があり、それらを一括して扱うことは難しい。そこで本論ではその手掛かりとして、“話しことばの後置修飾をどう教えたらいかに”について考えてみることにする。というのも、小学校から英語活動が取り入れられ、中学校段階でも口語英語による積極的なコミュニケーション活動が奨励される時代にあっては、口語英語のワクの中で捉えることが望ましいような言語事象に対して、その仕組みや用法を理解し効果的な教え方を考える、ということは優先的に論じられるべき問題だからである。

そこで、具体的な検討に入る前に、話しことばにおける文法をどう考えたら良いかということについて、非常に興味深い主張を取り上げてみたい。次の一節は *New Perspectives on Grammar Teaching in Second Language Classrooms* という本(引用文献参照)に載っている Pennington (2002) の書き出しである。

“Traditional grammars are unreal. ... They are therefore entirely inappropriate to the practical communicative needs of today's language students.” (p.77)

英語教師にとって刺激的なこの書き出しに続けて Pennington はさらに、従来の文法中心の外国語教授法の不備を補うはずであった CLT (Communicative Language Teaching) でさえ現実的には元の体質から抜け出すことが出来ていない、と言う。

“Communicative Language Teaching has sought to address the gap in traditional



language teaching between grammar and usage by a focus on the communicative process and the negotiation of meaning between participants. The communicative approach has, however, sought to fill this gap indirectly, as it does not necessarily include a systematic treatment of grammar, even one defined in communicative terms. In fact, many adoptions of “communicative” approaches represent an essentially structural-situational approach, that is, traditional grammar with “communicative enhancements.” (p.78)

最後にある traditional grammar with “communicative enhancements” とは “コミュニケーション活動を増やしてはいるが、依然として文法教授が中心となっている教え方” というような意味であろう。3節でも述べたように、日本の検定教科書はまさにこの路線上に位置するものである。

ここで注意しなければいけないのは、文法中心の授業がダメと言っている訳ではないということである。極めて簡単な日常会話が出来ただけの良いのであれば話は別だが、本来外国語の学習にはそのことばの仕組みや用法に対する一定の（ある程度深い）理解が伴わなければならない。学び方が直接的であろうが間接的であろうが、文法を無視した外国語の学習はありえないのである。では何が問題かというところ、その柱となっている文法が“書きことばをベースにした書きことばのための文法” だということなのである。そこに CLT がそれほど上手くいかない大きな原因の 1 つがある。“話しことばによる活発なコミュニケーション活動” を目指しているのにも拘わらず、そのベースに使っているのは“書きことばのための文法” なのである。実際、教科書の 1 つのユニットの中で、文法事項の説明を他の学習活動と切り離して行うということは、それほど珍しい光景ではないだろう。

そこで、話しことばによる活発なコミュニケーション活動を可能にする“話しことばのための文法 (Grammar for Spoken Language)” が重要になってくる。もちろん、このような文法の必要性は以前から指摘されていたが、話しことばの文法と言うと、会話の決まり文句を流暢に言えるようになるためのものぐらいにしか考えられていなかった。今必要と

されているのは、豊かで創造的なオーラル・コミュニケーションを可能にする、実用的知識・実践的能力としてのシステムティックな文法なのである。

とはいえ、話しことばを制御する全ての要因を列挙することは現実には不可能であり、また列挙された要因を有機的に組み合わせてたった 1 つのシステムを構築するのも、それほど価値あることとは思われない。人間は様々な異なるシステムをその時々状況に合わせて適切に運用することが出来るからである。従って、話しことばに関する全ての事象を扱える文法システムを考える必要は無く、特定の事象に対応した（サブ）システムを議論すれば良い。では、本論で問題としている“後置修飾の挿入表現的働き”を実現する、つまり、学習者にそのように後置修飾を使わせる文法とはいったいどういうものになるのだろうか。1 つの候補として Brazil (1995) が提唱した Incremental Grammar のようなものを考えることができるだろう。

Brazil はコミュニケーションの手段として用いられることばを、その産出の最終形態で捉えるのではなく、コミュニケーションの目的を達成するためにどのようにことばが用いられるかというプロセスの中で、あるいはプロセスそのものとして、捉えようとする。それによれば、人間はことばを時間の軸に沿ってその瞬間瞬間に (from one moment to the next) 断片的に (piecemeal) 作り出しているという。言語要素を “step-by-step で順次増し加えて (increment)” 発話を形成するので Incremental Grammar と呼ぶのだが、このような産出の捉え方は、他の多くの知見とも見事に合致する。例えば、ことばの理解や産出において重要な役割を果たすワーキング・メモリー内の音韻ループに一時的に保持される音声情報は、“2 秒というタイムスパンに収まる量 (門田, 2007)”, あるいは “ $7 \pm 2$  音節 (河野, 1997)” と言われている。さらに、Rost (2002) によれば、通常の発話は“聞き手の様子を見ながら発話内容を変更していくことができるような 2 ~ 3 秒程度の意味的まとまりを有した pause unit” の組み合わせによって構成されているという。つまり、呼気の量、音韻ループの処理能力、適切なコミュニケーションのあり方といったものは、実は全て有機的に結びついているのである。そうであればなおさら、本論で取り上げてきた後置修飾の挿入表現的働きに説明を与えその産出を支援するシステムとして

Incremental Grammar のようなものを考える、ということは十分に価値あることと言えるだろう。

そこで、実際にどのような形でこの考え方を授業に取り入れられるかを考えてみたい。要は *piecemeal production* を教師が支援（あるいはナビゲート）すれば良いのである。

(25) 前置詞句による後置修飾を含む場合<sup>4</sup>

Target: Everything in the shop is just 100 yen.

(イラストを見せながら)

教師 「全ての物がね」

生徒 Everything ...

教師 「あ、この店の中のね」

生徒 in the shop

教師 「たった100円なの」

生徒 just 100 yen

教師 「つなげて言ってみようか」

生徒 Everything ... in the shop ... (is) just 100 yen.

(26) 接触節を含む場合

Target: Anything you want to eat will be served here.

教師 「どんなものでもね」

生徒 Anything ...

教師 「あなたが食べたいと思っている..」  
(上げ気味のイントネーションで)

生徒 you want to eat

教師 「出てくるよ、ここでは。will be ...」  
(同じく上げ調子で)

生徒 will be ... served here.

教師 「つなげて言ってみようか」

生徒 Anything you want to eat ... will be ... served here.

この2つのやりとりは、例示のためにかなりナビゲートしやすそうなものを選んだのだが、(21)にある No one や The last thing (The last thing you want to do is ... という場合の the last thing であり“最もしたくないこと”というニュアンス)のような主語では、ナビゲートする方もされる方もそう思い通りにはいかないであろう。しかし、このようなものは何回か練習しているうちに両者とも直

ぐ慣れてくるものである<sup>5</sup>。piecemeal, つまり一度に少しの英語を口から出せば良いのだから、学習者の心理的負担が小さくて済むというメリットもあり、早い段階で一定の学習効果が期待できるだろう。書きことば用の文法を身につけさせ、それに違反しない完全な文でコミュニケーションさせようとする、どうしても一歩後ろに下がってしまう。大事なものは、思いついたことを少しずつ口に出していただいても最終的にはそれほど変わらない文が出来上がり、コミュニケーション的にはなんの遜色も無いどころか相手の反応を見ながら発話を繋げていけるというメリットもある、ということを経験者に感覚的に学んでもらうことであろう。

## 7. おわりに

英語の文法事項の中では比較的問題が無いと思われる後置修飾であるが、実際には“なんとかしなければならないもの”の1つであるようだ。なににより“後置”という表現が、後置修飾を持たない日本語との語順の違いを際立たせ、結果として“返り読み”による文法訳読式の授業に大義名分を与える大きな理由の1つになっているということがまず問題であろう。また、日本語に訳すことによって英語の後置修飾が持つ本来の意味や働きが隠れてしまうということにも注意する必要がある。このような問題は外国語学習の分野では“母語と学習言語の間の距離”の問題として論じられ、外国語学習の成否に大きな影響を与える可能性が指摘されている(白井, 2008)。本論で後置修飾についてあれこれ論じてきたのも、要はこの問題なのである。

本論では、話しことばによる活発なコミュニケーション活動を支えるための文法という視点に立って、話しことばにおける後置修飾の働きを実際の用例を基に検討し、またそれに適した文法システムの1つの候補として Incremental Grammar を挙げた。ここで注目すべきは、incremental (あるいは piecemeal) に文を構築するという考え方にある。語順の違いという問題は、訳読をベースにした学習法に比べ、非常に小さくなるということである。

また、実際に Incremental Grammar の考え方をどう使えるのかということで、日本語を用いたナビゲーションの例を示した。これに対して、結局は日本語との対応で教えているのであって、訳読と変

わらないのではないかという批判があるかもしれない。というのも、日本の英語教育には CLT=Teach English in English という強い思い入れがあり、文法訳読式の対極に位置づけられているのがこの Teach English in English であるからである。つまり、文法訳読式はコミュニカティブに成り得ず、コミュニカティブであるためには Teach English in English でなければならない、という図式が出来上がっているのである。

しかし、CLT はあくまで “Teach or learn English in communicative contexts” であって、母語を利用して教えるはいけない、ということではない。大事なのは学習言語による実際のコミュニケーションを体験しながらその言語を学習するということであり、そこに至る過程では、事項によっては母語を使っての学習の方がはるかに効率的で定着度も高いということがある。そのためにも、対象となる言語の仕組みやその言語特有のコミュニケーション方略をきちんと理解して、最も適した教授法の組み合わせを考えるということが教師には求められている。その意味で、より活発なコミュニケーション活動への可能性を持つ piecemeal な発話の仕方をも身につけるために日本語をキューとして用いたとしても、それは CLT の主旨に反しないばかりか、むしろ CLT をより積極的に推進することに繋がるはずである。

Incremental Grammar の提唱者である Brazil は、piecemeal な発話において最終的に生成された個々の節や文は最初から意図したものではなく偶然の産物に過ぎない、とまで言い切っている。そこまでの覚悟を持って英語教育を行えるのか、簡単に答えを出せる問題ではないかもしれないが、考えるとワクワクしてくるような気もする。コミュニケーションに対する意欲や活発な発話にブレーキをかけることなく、しかも徐々に正確性を増して行くような全体マップ（行程表）を教室英語についても描くことが出来るのか、そもそもそういう考え方が必要なのか、目の前に新たな課題があるように思われる。

## 注

1. 解説書では関係代名詞節の前に接触節を導入する理由として次の 2 つが挙げられているが (p. 189)、直接的な根拠とはなりにくいように思わ

れる。

- I bought a book.→a book I bought のように語順の変更だけで新しい修飾構造ができる。
- この表現は特に口語で多く用いられるので、実用的でもあるし、早くから学ぶ価値もある。

英語の語順の問題は日本人英語学習者にとっては常に sensitive な問題であり、日本語訳に頼る教え方ではなおのこと “語順の変更だけで” というわけにはいかないであろう。また “口語的・実用的なものは早めに” というのであれば、教科書そのものがもっと違うものになっているはずである。

2. ただ、現在分詞には過去分詞には無い問題がある。その 1 つが時制に関するもので、一般に分詞は動詞の不定形の 1 つで時制要素を持たないため、次の a と b の swimming の時間に関する異なる解釈は文脈に拠らなければならない。

- a. The two boys swimming in the lake are my sons. (泳いでいる)
- b. The two boys swimming in the lake were drowned this afternoon. (泳いでいた)

時制要素を持たないという点では過去分詞も同じだが、過去分詞の場合は受動の意味を表すため、分詞で表されている行為 “～された” は主節で述べられている行為に先行して生じていると考えやすく、解釈上の面倒さはあまり感じない。加えて、次の c に 2 通りの解釈が可能ないように、現在分詞は必ずしも進行相を表すわけではないので、その意味でも現在分詞の後置修飾は解析処理の負担が大きい構造と言えよう。

- c. But people using cell phones sometimes aren't careful. (使っている) (使う)

3. 今回の書きことばの資料の中に Marie in her wedding dress with a gorgeous bouquet of flowers comes down ... というのがあった。固有名詞には制限的な修飾語句は付かないのが普通であり、書きことばの例でもあることから、本来 in her wedding dress with a gorgeous bouquet

of flowers の前後にカンマがあって良いはずである。カンマが無くて大丈夫ということは、この長い前置詞句が強い制限的な働きを持っていないということの証拠でもある。

4. 次のような文は一般に提示文と言われ、文末の with a long stick が最も伝えたいことになる。

A man appeared with a long stick. (男の人が現われてね、なんと長い杖を持っていたんだよ)

この with a long stick は主語名詞句の後ろの位置にあったのが文末に移動したものである、とする考え方もあるが、piecemeal な発話という観点から見ると、元の形(と考えられているもの)は明らかに不自然であろう。

5. step-by-step に文を作っていくので、教師がナビゲートする時はイントネーションが有効な道具となる。もし生徒がなかなか英語を口に出せなかったら、次のようにナビゲートすると良い。

教師 「全ての物がね」  
生徒 Everything ...  
教師 「あ、この店の中のね」  
生徒 ..... (沈黙)  
教師 in .... (語尾をやや上げ気味で待つ)  
生徒 in the shop  
教師 「そう! で、たった100円なの」  
生徒 just 100 yen  
教師 「つなげて言ってみようか」  
生徒 Everything ... in the shop ... (is) just 100 yen.

## 引用文献

- Brazil, D. (1995). *A Grammar of Speech*. Oxford: Oxford Univ. Press.  
門田修平 (2007). 『シャドーイングと音読の科学』 東京: コスモピア  
河野守夫 (1997). 「リスニングのメカニズムについての言語心理学研究」『ことばとコミュニケーション: 外国語教育へのニューアプローチ』第1

- 巻. 5-31頁 大阪: ことばの科学研究会  
McCarthy, M. (1992). *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.  
荻原 洋 (2000). 「従属接続詞の談話モダリティとその英語教育における意義について」『富山大学教育学部紀要』第54号. 79-89頁  
Pennington, M.C. (2002). 'Grammar and Communication: New Directions in Theory and Practice', in Hinkel, E and S. Fotos (eds). *New Perspectives on Grammar Teaching in Second Language Classrooms*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum.  
Rost, M. (2002). *Teaching and Researching Listening*. London: Pearson Education.  
白井恭弘 (2008). 『外国語学習の科学』東京: 岩波書店

(2012年10月19日受付)

(2012年12月19日受理)